

わたしは西瓜が食べられない

伊藤 見桜

クラス担任の先生が産休に入った。最後のホームルームで「出産って、よくすいかが鼻から出るみたいだって言われるけど、どれくらい痛いのかしら。今からどきどきしちゃう」と、暖かい顔で大きく膨らんだお腹を撫でながら言っていた。

尾本の鼻からすいかが生まれてきたのは、例年よりも二〇日ほど遅れて梅雨明けしたとニュースで言っていた日のことだった。

「ねえ、鼻からこんなのが出てきたんだけど」とSNSで写真付きメッセージが送られてきた。わたしはその時、やっと嫌いな数学の授業が終わりに、お昼の弁当を準備している時だった。

緑色の、20mm ぐらいの玉だった。質感はスーパーボールみたいだけど、ゴムの成分をやわらかくした感じ。だが、鼻から出てきたということは鼻からの分泌物の可能性もある。

「鼻くその間違いじゃない？」と送ってみる。すぐに返信があった。尾本も昼休みのようだ。

「緑色の鼻くそ見たことあるの？」

今のところ、「年生きてきて鼻から緑色の分泌物が出てきたことは」ない。でも鼻をかんだらでてきたってどういうこと？」

「鼻をかんだら内容を確認する習性があるんだけどさ、」

どんな習性なんだ。わからなくはないけど。

「そしたらさっきこれが出てきて」「ねえ、これさ、」「すいかに見えない？」

尾本が鼻をかんだ時に内容を確認する習性があるってよかったのか、よくなかったのか。でもこの習性があったから、鼻からすいかが出てきたのが発見されたのである。

午後の授業も終わり、部活をそうそうに切り上げて私は尾本の家に向かった。尾本は小学校からの友達で、私の家から歩いて二〇分ぐらいのアパートに住んでいる。高校は別々だが、家が近所ということもあり、今も連絡を取り合っている。

「尾本、来たよ」

「わざわざありがどう。暑かったでしょ？」

「梅雨が明けたらとたん暑くなったね。おじゃまします。」

尾本の部屋は西日がよく差しこむ。尾本の左頬が少し赤い気がするが、夕日に染まっているからだろうか。

「今日は和田君とデートじゃないの？」

「ちがうよ。」

和田君は尾本の恋人で、バイト先で知り合ったωつ年上の大学生らしい。尾本とは半年前から付き合っている。

「それより見てよ、すいか」

机の上に、ティッシュで包まれた緑色の玉が置かれていた。実物のほうが、すいかに見える気がする。

「わたし、すいかが綺麗じゃない時なんて見たことないけどさ、本当にすいかみたいだね。鼻から出たときは痛くなかったの？」

「痛くなかったよ。鼻からすいかが出るのって何かのたとえにあった気がしたけど、忘れちゃった。」

「でも、どうしようか。これ。」

と尾本。

「もしすいかだったら、育てたら食べられるのかな？」
と私。

「え、育てるの？すいかなんて育てたことないけど。」

「わたしも育てたことないけどさ。でも、すいかの赤ちゃんみたいでかわいくない？あと、本当にすいかだったら、きっとノーベル賞とか取れちゃうよ。」

「ノーベル賞は無理だと思うけど、ワイドショーには多分引っぱりだこだね。鼻からすいかが出た高校生って変な見出しついちゃうよ」「でも、赤ちゃんみたい、か。」

尾本はすいかを見つめていた。

わたしが出された麦茶を飲み干す頃、「よし、育てよう」と尾本は言った。夕日が沈んでも、尾本の左頬は赤いままだった。

それから私たちは、ネットですいかの育て方を調べた。鼻から出たすいかは、受粉して果実が肥大した状態みたいであることが分かった。あとは陽に当てる面を変えながら、大きくなるのを待つらしい。幸い、日頃から学校は夏休みを迎えることになっていたから、これなら育てられそうだとω人で話した。

鼻から出てきたすいかが、地面で育つものと同じ育て方でいいのだろうかとも思ったが、尾本曰く一日に数回、少量の水をかけてあげ、すいかを日に当たる場所に置いておけば日に日に大きくなっていくらしい。わたしも部活や補習の無い日は尾本の家に行き、すいかの成長を見守ることにした。

白いハンカチの上で日向ぼっこをしているすいかを横目に、わたしたちは夏休みの課題に取り組んでいた。尾本は頭が良いから、ありがたいことに昔からよく勉強を教えてもらっていた。

「尾本、生物の問題で分からないところがあるんだけど。人間の水分量って何パーセントなの？」

「平均60%かな。ちなみに赤ちゃんは80%だよ。」

「赤ちゃんってそんなに水分があるの？それじゃあほとんど水だね。だからあんなにふにゃっとしているのかな。」

「赤ちゃんが柔らかい理由は他にもあると思うけどね。すいかも80%は水らしいけど、人間じゃないから硬いのかな。水分量は人間の赤ちゃんと変わらないのにね。」

尾本の声がさっきよりも少しくぐもった気がした。

「そういえば、最近尾本のお母さん、帰ってくる時間が遅いの？この前部活が16時頃に終わって帰るときに、尾本のお母さんがアパートに入るのを見たよ。」

尾本の家は母子家庭だ。

「うん。仕事の量を増やしたみたい。最近は2時ぐらいになるときもあるよ。」

尾本は大学に行きたいと言っていたから、お金が必要なんだろう。

「それじゃあ今度わたしの家に晩ごはん食べに来なよ。ママもそのほうが喜ぶし。」

「嬉しい。バイトがない日に今度行かせてもらおうかな。」

でも尾本、ここ最近バイトに行っていないよね？という言葉は、私の喉から外には出ようとしなかった。

すいかは私たちのはじめの不安をよそに、すっかり大きくなっていった。夏休みが残り半分になった頃から、縞々の模様を見せ始めていた。

～日後、尾本が夕飯を私の家に食べに来た。ママは張り切って尾本の好きなオムライスを作ってくれた。

何気なく付けていたテレビで、動物園のパンダの育児放棄のニュースが流れている。

「パンダはさ、自分の子どもを育てるのをやめても、代わりに人間がその子を育ててくれるからいいよね。人間はそういうことをすると無責任だって非難されるのに。パンダはニュースになっても特に変わらずにこれからのものんびり生きていくんだろうね。」

と何気なくわたしが言うと、

「でも、人間も色々な事情で育てられない人がいるから、自分で育てるのが難しくなっちゃった親は施設に預けるのが手段としてあるよね。」

と尾本から返ってきた。

「確かにそういうのはあるけどさ、そもそも自分で育てられない無責任な人は、子どもなんか産むべきじゃないと思うんだよね。」と私。

「パンダは無責任でも許されるのに、なんで人間は駄目なの？」と尾本。

「パンダは数が少ないし、生まれることを望まれているからいいんだよ。」

わたしがそう言うと、尾本の顔が急に歪んだように見えた。

「望まれてるって、誰に望まれているの？じゃあ、望まれていなかったら生まれるべきではないの？逆にセックスしても妊娠できなくて、不妊治療までして、子どもを望んでいても生むことができない人はどうなるの？性別の壁で子どもを産むことができない人だっているじゃない。望んだって産むことを許されない人だっているのに。」

と尾本がさっきまでとは違う、強い声で迫ってきた。

わたしは尾本がこんなに感情的になるのを見たことがなかったのと、セックスという言葉が恥ずかしながらに言っていたことに驚いて、次の言葉が見つからなかった。でも、尾本が傷ついているのは分かったから、

「なんか、色々ごめんね。」と返した。

尾本からも

「ごっちょこそ、急にごめんね。」と返ってきた。顔はまだ少し歪んでいるように見えた。

尾本が帰った後、ママにどうしてわたしを産んだのか聞いてみた。ママは少し困った顔をしていたが、わたしに話してくれた。

「ママも難しいことは分からないけどね。あなたが授かる前は、子どもがほしくてたまらなかったけど中々タイミングが合わなくて。なんでこんなに望んでいるのに授からないのかって焦っていたわね、今思うと。でも、雨が明けたときに虹が必ずかかると期待しないようにしたらあなたが生まれたの。」

それから何となく尾本の家には行きづらくなっていたが、SNSですいか順調にそだっている様子は送られてきた。

夏休み最終日の夕方、尾本から連絡がきた。

「すいか、育ったよ。一緒に食べよう。」

わたしは急いで準備をし、家を出た。暗い雲が空を覆っている。

尾本の部屋には、スーパードで見るとような小玉の西瓜があった。

「すごいよ、ちゃんと西瓜になったね。これはノーベル賞間違いなしだよ。」

「うん、本当に西瓜になったよ。ノーベル賞は取れるかわからないけど、ちゃんと育てられたよ。」

ぽた。

「自分の身体から生まれたんだよね、この子」

ぼた。

「どうして、」

「どうして、だめだったのかなあ」

ぼた。ぼた。

夕立が窓を叩きはじめた。

「この子は育てられたのに。なんで、だめだったのかなあ。」

本当は気づいていた。尾本と和田先輩に何があったのかも、そのせいでバイトを辞めたことも、尾本のお母さんが頑張っていることも、尾本のこころが泣いていることも。

赤ちゃんは、身体が赤いから、赤ちゃんと言うそうさ。この西瓜を切ったら、真っ赤な果実が露わになるだろう。そう思ったら、急に鼓動が早くなった気がした。

部屋に西日が差しこみ始める。夕立はやんだみたいだ。虹はかかっているだろうか。

尾本は、望んでいたのだろうか。

泣かないで。わたしは「それ」を抱える尾本が、お腹を撫でていた先生と変わらずに見えるよ。